



# 自立した国家建設、 多様性の統一とは逆行 ガンディー曰く社会的な大罪は 理念なき政治



マハトマ・ガンディー

インド・ビジネス・センター代表 島田 卓

## 東アジア地域包括的経済連携(RCEP)離脱と 英国への急接近、「時間稼ぎ」と「存在感」

1月5日、インドのモディ首相に英国のジョンソン首相から電話が入った。1950年1月26日のインド憲法発布を祝う「インド共和国記念式典」への参加を、コロナの終息が見られぬことから見合わせたい、との連絡であった。毎年1月26日に挙行されるこの式典は、ニューデリー中心地の大統領官邸正門前から一直線に伸び、第一次世界大戦で英軍の盾となって命を落とした陸軍兵士1万名以上の名前が刻まれ「永遠の火」が灯るインド門までの約2kmにわたって軍事パレードが行われ、各州の出し物が披露される国事である。

同式典へ主賓招待状を出すに当たってインド政府は、自国にとって最も重要と思われる時の外国トップを選ぶ。日本からは2014年、安倍首相（当時）が初めて主賓として招かれ「日印戦略的グローバル・パートナーシップの強化」に署名した。翌2015年にはオバマ米大統領（当時）が米国合衆国大統領として史上初めて主賓として出席し、米印関係強化の姿勢を明確に打ち出している。当時の現地紙によれば、当初オバマ氏は招待者候補リストには載っていなかったが、モディ首相の一

存で実現させてしまったようだ。

今回のジョンソン招待にも、意図があったことは明確だ。ジョンソンもそれを察知し「2国間関係の拡大を推進する」と約束。6月に英国で開催予定のG7サミット前の訪印を示唆。同サミットに韓豪と共にインドもゲストとして招待することも確認している。

インドの思惑には優れて対中国関係が絡んでいる。インドは昨年11月に誕生したグローバル経済圏の約3割を占める東アジア地域包括的経済連携（RCEP）から離脱している。域内の交易条件が統一されるとインドの脆弱なインフラと低生産性では、他加盟国に勝てるわけではなく、特に中国との貿易（年間5兆円以上の赤字）を考えると、RCEP加盟は自殺行為だ。「Make in India」を標榜するモディだが、実態は中国を中心としたアジア諸国から基礎部品を輸入し組み立てるだけの「Assemble in India」に他ならない。真の製造業立国になるための時間稼ぎが必要だ。

一方、昨年末にEU離脱を完了した英国は2月1日、日本など11カ国が参加する環太平洋パートナーシップ協定（TPP）への加盟申請を行った。発足時の参加国以外による初の正式な加盟申請だ。EU離脱はしたが、国際社会でそれなりの影響力を維持したい英国と、

中国を中心としたアジア諸国との対等貿易競争を一時的に回避したいインド両国の思惑が一致したものと思われる。

## 歪んだままの労働人口構造 脆弱な製造業基盤と低生産性の農業

中国に匹敵する市場規模、ハイテク人材も多く、平均年齢30歳程度の若者国家のインドだが、それは諸刃の剣だ。市場規模に見合った経済を成立させるためには、雇用創出力が伴わなければ内需は高まらない。高学歴を前提とするハイテク業界では、毎年数百万人規模で生まれてくる低学歴労働力の吸収母体には到底成り得ない。今インドに必要なのは製造業の基盤拡大だが、結果は出せていない。モディは2025年までにGDPに占める製造業比率を25%にするとしているが、現状では17%程度で横ばい推移だ。また、2022年までに製造業における雇用を1億人拡大するとしているが、こちらは雇用統計が未整備で検証は出来ずにいる。裏返せば好きなことを言える。

また、就業人口の半数ほどを占める農業のGDP寄与率は16%程度と、その生産性の低さは目を覆うばかりだ。インドは米国とほぼ同量（年間約1億t、日本は約730万t）の牛乳を生産する世界最大の酪農国だが、国連食糧農業機関（FAO）の資料によれば、インドで1ℓの牛乳生産にかかる労務費は米国の約40倍。とそれ上、インド食品衛生局のサンプル調査によれば、インドの乳製品の37%に不純物が含まれており安全性に問題があるとしている。

最新鋭の技術を駆使し低コストを実現し、衛生面でも安全な豪州やニュージーランドの酪農品が低関税で入ってくれば、インド酪農業の破綻は火を見るより明らかだ。

インドの第一次や第二次産業の現状を考えれば、抜本的改革が避けて通れないことに異を唱える人はいまい。要はそれをどう実行するかだ。モディは最近、頻繁に“アトマニル

パール・バラット：Atmanirbhar Bharat（Self-reliant India：インドの自立）という言葉の口にし、そのための政策導入に躍起だが、ヒन्दゥー至上主義の下、イスラム教徒やシーク教徒等との対話を持たず、政策導入のための明確な手順や、政策遂行に必要な多彩な人材確保を行わず縁故政治に走っている。それを諫めようとする人も見当たらない。何か事が起こるとネットの遮断までしてしまう政府への不信感が募り、最近の農民ストにみられるように、反政府行動が起こる。

モディは2月8日、インド上院での大統領の予算国会開催演説後「インドはただ単に世界最大の民主主義国家であるだけではなく、民主主義の生みの親である」と述べている。

「インド独立の父」マハトマ・ガンディーは、多様性の中での統一“Unity in Diversity”の実現を求めて、“Self-confidence”と“Self-respect”（自信と自尊心）を以って独立を勝ち取ろうとした。ガンディーの本名は、モハンダス・カラムチャンド・ガンディー。マハトマとは「偉大なる魂」という意味で、アジア初のノーベル文学賞受賞者でインドの詩聖と言われるタゴールから贈られた尊称だ。また、アインシュタインは「このような人物が、肉と血をもってこの地上を歩いたとは、未来の世代は信じられないだろう」とガンディーの気高い人間性に惜しめない賛辞をおくっている（『ガンディーとタゴール』森本達雄著第三文明社）。

その類稀な人物が「社会的な大罪」の1つとして挙げたのが「理念なき政治（Politics without Principal）」である。モディは選挙に勝つことを至上命題とし、結果をもって全てを「善」とする。そのために国政がどうなってしまうかには言及しない。「自立するインド」を口にするモディだが、果たして彼がインド建国の父が残した言葉をどこまで理解しているのか疑わしい。